いらつめ第卅九號目次（明治二十三年一月廿二日）

●挿　畫…城砦雪夜の圖……………小林清親
●小　說…心づくし（第四回下）……毛布野女史
●家　政…片面染めの布で中補襦袢を縫ふ法‖半纏を仕立てる順序‖一つ身裁縫法‖中裁ち裁縫法……………木下貞子
●文藝美術…未見の友に落子にたくる唱歌……………美妙齋主人
○乾坤の戀（唱歌）……………いらつひめ
○伊勢家集（其一）
○懸賞文藝新題
●雜　纂…新年來の流行‖日本婦人（英國雜誌掲載文）‖聲をよくする心得‖漢字異讀同義‖其他
●小　說…婚禮後
●答　書…花及び色の投票
●通信問答
●餘　興

社告及び社則　いらつめ一部並製金二錢五厘郵税共金三錢、十二部金二十九錢郵税共金三十五錢、二十四部金五十七錢郵税共金六十九錢、三十六部金八十四錢郵税共金一圓〇二錢、四十八部金一圓郵税共金一圓二十四錢●別製一部金三錢五厘郵税共金四錢、二十部金六十五錢郵税共七十五錢、五十部金一圓六十五錢郵税共金一圓九十錢●並別兩製共前金領收の上で無くては差上げぬ事●府內に限り無郵税●毎月四回（八日十五日二十二日三十日）發兌●金子御差し送りの手續きは郵便小爲替なれば拂渡郵便局さある處に（神田郵便局）さ記し、受取人欄內に（神田平永町九番地成美社）さ御記入の事●郵券代用は郵便爲替の無い處に限り五厘切手で一割り增しなれば妨げ無い事●見本は五厘切手で並製三錢別製四錢領收の上差し上げます●廣告料一行金八錢、割引無し●第卅八號から本社から賣り出す誌さして雜誌の表紙に成美社の捺印を加へましたから是を目標さして御求めを願ひます。捺印の無い雜誌に就いては本社で一切責に任じません。捺印の無いのを御求に爲つても代金御支拂に及びません

從第三十八號至第四十七號十部版權所有

明治二十三年一月廿一日印刷
明治二十三年一月廿二日出版

發行人　東京市神田區平永町九番地居住　山田武太郎
印刷人　同市同區同町同番地成美社方寄留　佐野忠吉
發行所　東京市神田區平永町九番地　成美社

本號には　色刷（石版）城砦雪夜（の圖）裁縫（美妙子及びいらつ姫作唱歌）伊勢家集
○美聲の心得　○（英國雜誌掲載の中抄譯）日本婦人（小說）婚禮後
花及色の投票

いらつめ第三十九號

小説

第四回下

毛布野女史

「いけませんョ。何にも貴娘そんなに御心配には及ばないぢやありませんかね。何時かも芳原の人や根津の人なんどが大勢監獄へやられたけれども直ッき歸つて來ましたぢやありませんか。お孃さん斯うして御覽遊ばしてハ何うで御坐いませう。妾の親父が極々懇意な御方で警視廳へ出て御坐なさる人なんですが其御方に御頼なすッて……いゝえ何にも六ケ敷ことはありやしません〳〵。それハ〳〵其御方は大層優しい方ですッて」。

「若し其御方に願ッて嚴父さんが歸られますことなら妾はどんなことを爲ても……」

「えゝ貴娘が其思召があるなら屹度出來ます。そんなら妾ハ鳥渡宅まで往ッて參ります。」

甲斐々々しくも立ち上り、急ぎ我家に立ち歸りしが暫らくありて歸り來り、

「お孃さん御待遠で入らッしやいましたらう。急いだんですけれども終遲くなりました。丁度親父も宅に居ましたから一處に參りましたが直ぐ此方へ呼びましやうか」。

「それはまア御氣の毒さまでした。何卒うんなら此方へ。貴娘御起なさるには及びませんよ。さうして入ッしやい。あの嚴父さん此方ですよ。」

「はい〳〵大きな聲をして失禮な直ぐ參ッても宜いのか。」

と云ひつゝ障子を押し明けて入り來りしハ前回に略其履歴を現はせし八瀬仙作といへるもの、素よりお琴は初對面殊には父の大事件を頼まんとする人なれば急に床より這ひ下りて、

「どうも誠に恐れ入ります。段々お丁さんの御世話になッて居ります……何卒お丁さん其御布團を上げて下さいませ」。

「御構ひ下さるな。いやいや何うも飛んだ御迷惑なことが出來まして、嘸御心配で御出でせう。今娘の話でしたが、一体貴娘はなんですか……彼の彌七を豫て御懇意でゞも、して何にか……あの御緣談のことでもありはしませんか……ないと仰しやるのですか。なになけれや宜しい……能う御座んす。うんなら一ッ話して見ますが、若し其

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

人が承知をした上ハ貴娘からも直きに御頼なさるが宜しいです。　いや貴娘が御出になるには及びません。　直ぐ其人を連れて參りますから、其上貴娘が御頼なさるには……そりや何うなりと御胸にあることといで――ハア御面會にさへなれば屹度出來ますよ。　そんなら私は直く同道して參ゐります。」

「左樣なら何卒何分にも宜しう。」

「さ何卒ぞ其處でそれでは御病氣に障ります。　なに是からハ御家族同前。　なに御家族がないので御氣が揉めませう。　お丁折角看病をして御上けな。」

と獨り呑み込み立ち去りたる後にてお琴はつくくと思ひ廻せば今の男の呑み込み振り且は詞の端々にも何やら仔細のありさうにて心がゝりとなりたるゆゑ、猶はも思案を廻らすに嘗てお丁が取次たる女の樣子と今の談と或は因のあることか若し然らんには何うしたものかと再び腦を痛めしかど、恰も五里の霧中に在れば千岐八千岐道ならぬ捷徑を取り行くべきか、道の險易は顧みず我行く道を行くべきかと父の難義を救ハんものゝと思ふ心の一筋もゝに踏み迷ふこそ孝行の道なるべけれ。　去り乍ら女の道に外れてハ孝も畢竟孝ならず。倩如何して宜からんか、心づく、しぞ哀れなる。

家政

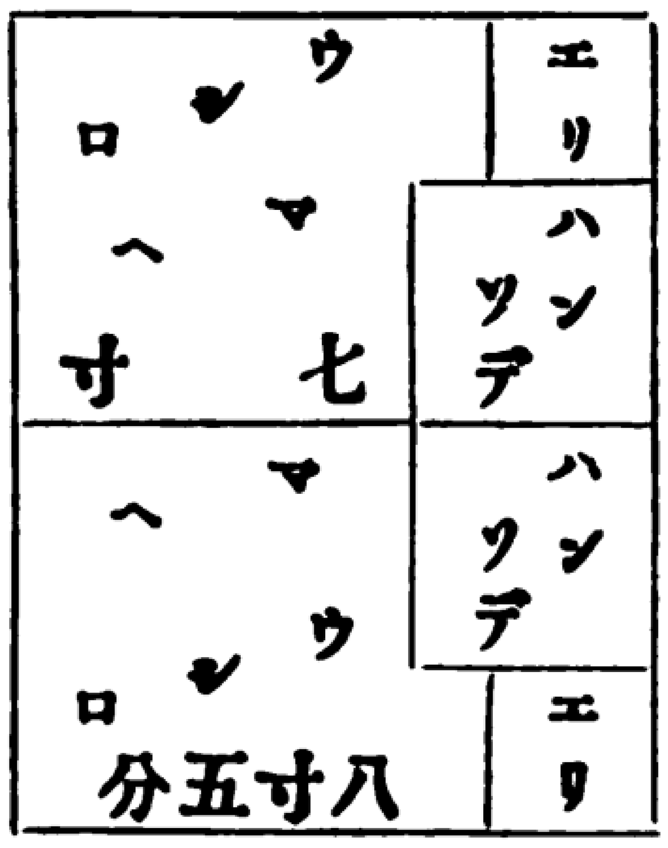
裁縫獨學比び(高等第九)

木下貞子

片面ずめの切れ地の丈一丈二尺六寸を以て半袖襦袢の裁縫法

巾は一尺三寸の者です袖丈けは一尺四寸二分、丈けは二尺八寸お裁切るのです。

袖丈一尺四寸、丈二尺八寸、襟肩二寸三分山襠に給はするのです。



半纏を仕立る順序

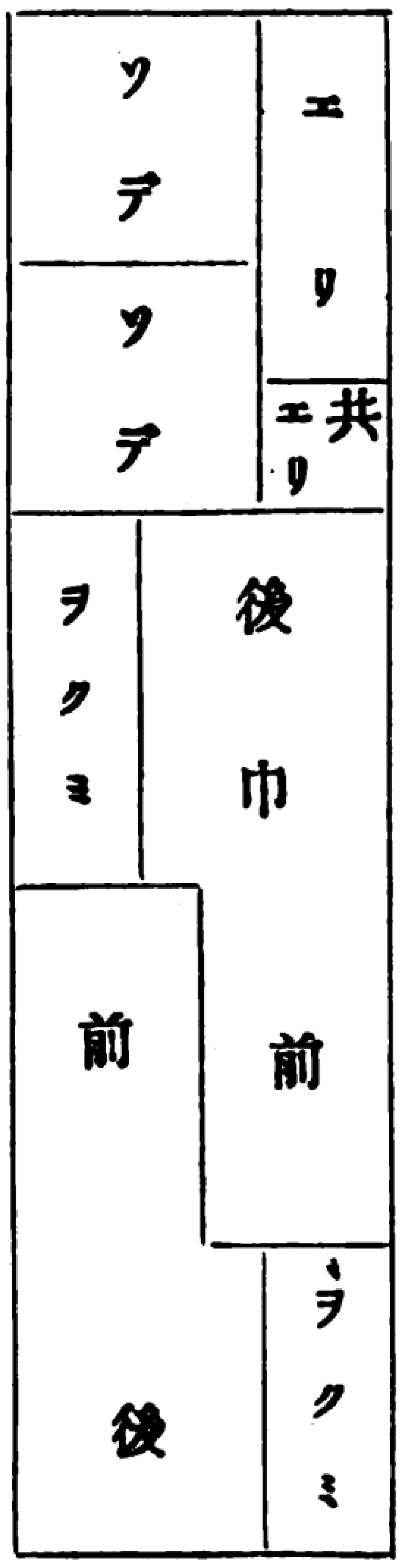
最初に表の袖を縫ひ躾糸をかけ袖巾の寸法をきめ裏の袖口をかけ袖下を縫ひ表の襟肩を右の方にあし脊縫を爲し後巾を度り而して肩巾を叉當りすぢを付け次に脇を縫ひ袖を付け前巾をはかり脊から右左へ襟を付け表の方にならひ裏をぬひ裾を合せ綿を入れるのです而して後くけるのです、くけ方ハ最初に袖口をくけ袷をくけ次に布緣をするのです。

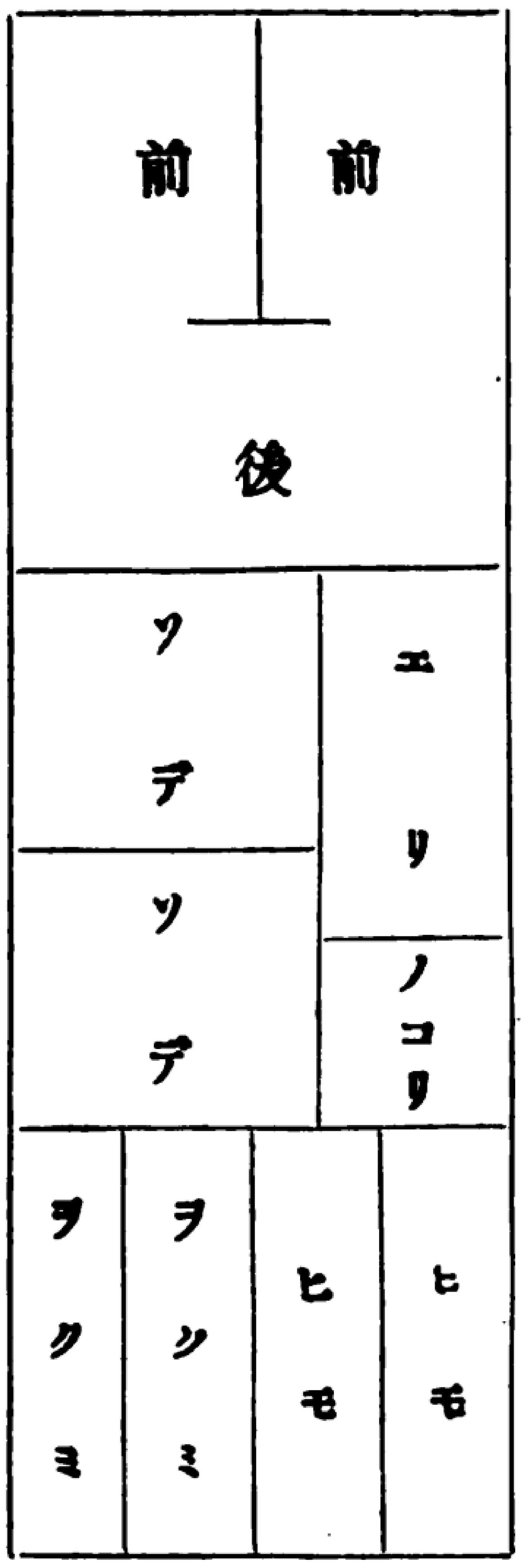
八寸五分巾丈け一丈三尺四寸を以て一ッ身裁縫法

丈け二尺五寸二分袖丈一尺五寸袖巾六寸襟巾二寸五分襟丈四尺三寸衽丈二尺三寸巾三寸紐巾二寸づゝに裁ち袖巾は五寸五分身の巾いつぱい袖附五寸身の八ッ口二寸五分裙下五寸衽下三寸襟巾一寸袖口の明五寸。

一尺二寸巾丈一丈八尺の切地にて中裁々縫法

丈ハ三尺二寸袖丈二尺一寸に裁切り身頃を三ッ身の様に裁ち脊落を以て衽と為し袖の端より襟を取るのです。





右は巾一尺二寸丈し丈八尺を以て中裁を裁つ法です。　袖丈二尺一寸袖巾九寸襟丈四尺五寸襟巾三寸

右ハ巾八寸五分丈一丈三尺四寸を以て一ッ身を裁つ法です襟肩一寸丈二尺五寸襟丈四尺三寸襟巾二寸五分袖丈一尺五寸袖巾六寸衽丈二尺三寸衽巾三寸紐巾二寸

單衣物を仕立る順序

第一表の袖の裏を見て袖口の切を向に袖を巳の方へ持ち袖口を少し引つり袖とたるましてぬひ其の次に袖下を縫ひ口先へ躾糸をかけ袖口を絎付け又袖巾と度り八ッ口をくけ裙下を絎るのです次に後巾を度り脇縫を為し袖を付るのです、　夫より前巾抱の巾をあたり又其巾の中間を度り右左の衽を付けるのです。　さりながら縫込は伏縫です。

次には劍先の止から裙下の標迄定規を措くか又は糸を引き篦を以て線を畫し襟を付け又表襟へ裏襟を縫付け襟巾を度り襟先を縫ひ襟と縫付るのです。　夫から裾を三ッ折となして絎付けるので仕立てあげた後壓を置くのです。

文藝美術

未見の友磊落子といふ人におくりし返事の歌

美妙齋主人

一

なお眞如！　愛憎を　去れ。
　啼きな　なせそ　めくらの　妻。
よく　見れば　月にも　くま　あり。
　人は　その　美　のみ　言ふ。

二

みちの　ため　身をば　つくさむ。
　その　みちは　天の　たまもの。
足らぬ　身を　不足に　すてゝ
　さとり＝えぬ、　それぞ　完全。

乾坤の戀

いらつひめ

かつらを の　月は　うみの　佚か？
わとを　追ふ　うしほの　色も　香も　濃かり。
夜は　妹の　むねを　まくらに　ねふり　つゝ
ちぎる　なり、　こがね　白銀　鎔くる　まで。

伊勢家集

三十六歌仙家集はほとんど世に絶えさうになりました。今の内之を再弘して置くのもいさゝか文學のためと考へ、こゝに此號から出します本は清水濱臣大人の藏書、今中根香亭氏の所藏の分を借りて許しを得て載せました。

いらつめ記者

いづれの御時にかありけむ、大宮す所ときこゆる御つぼねにやまとにおやある人さぶらひけり。おやいとかなしうして、をとこなどもあれせざりけるを、宮すどころの御せうとゝしでろいひわたり給を、しばしはさらにきかざりけるに、いかゞありけん、おやいかゞ（思ひつきにけり）いはんとなげきたりけるを、としごろへにければきゝつけてけり。されどすくせこそありけめとてことにいはざりけり。たゞわかき人はたのみがたき物ぞといひけるほどに、時のおほいまうちぎみにむこにとられにけり。其とりにぞおやもさればこそおどいひければ、この女

はづかしとおもふほどに、このをとこのもとより人お
こせたりける。　この女のおやは五でうわたりなりけ
る所にきてかきの紅葉なうたをなむかきたりける。
人すまずあれたる宿をきてみれば、今ぞ紅葉の錦おりける。
　見て女いと心うき物からあはれにおほえければ、
涙さへ時雨にそひてふる里は紅葉の色もこさまさりけり。
　とてねずもちの紅葉にさしてなむやりける。「人のこ
に成ぬれば我をいまハ」よもとはじと思ひて「もとあ
りけるやまとにいきてしばしあらんと思ひて女」
三輪の山いかに待みん年ふとも尋ぬる人もあらじと思へば。
「又あるほどに心ぼそげなの給へれば、いみじくあは
れになむ尋ぬる人もとあるは人わろくも。
もろこしの吉野の山なこもる共おくれんと思ふ我ならなくに
　男「これをいとあはれと思ひてかへしをはねせで、
　かくよみたりけるびはのおとゞ」
よをうみのあわと消にし身にしあればうらむるとずぞ歎まさり
ける。
　奈良坂「のわたりにぞおひつきておこせたりける女
　のかへし」

わたつみとたのめしをとのあせぬれば我が我身のうらを恨むる
「とてそ道なかにてかへしやりける」やまとな三月ば
かりにすむなさうくしく寺めぐりせんと思ひてあり
けるな、りうもむといふ寺にまうでけむ月の十一日わ
まりになんありける「見れば其だうの」ありさまハ、た
きは雲の中よりおちくるやうな見ゆ。　仙人のいはや、
といふ所はいたく年つもりて、いはの上のこけやへに、
むしたり。　あはれにたふとく物のみおほえて泪いお
つるたきにもおとらず「みしらぬこゝちにたぐひなく
めでたく見て物がなしく都思ひやられていしのもと
にしばしながむるに、此寺いとくらうなりぬ。　雨や
ふらんとすらんとゝもにある人々いそぎければ、雨は
ふらじ雪などいふ程に雪さらばかりにて」かきくらし
ふるある人〴〵いざ歌よまむといひければ
たちぬハぬきぬきし人もなき物を、なに山姫の布さらすらん。
　とよみたりければこと人よまず成にけり。　けふは
道に出てこしといふ所にやどりぬ。「かの寺のあはれな
りしとおもひいでゝまた」
見もいてゝ空にきみなで限なく、いとふうき身の世に歸なん

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

とひとりごちて袖もしほるばかりにうなきぬらしける。　かゝる程に「つかまつりしところ」よりはやのぼらせすと「おほせ給ひ」ければ、はやくのぼりたまへもいとより、みやづかへをこそし給へとれもひしふと思はいせていふにしぬる心ち「すべしよしなき君たちをやれ思ひかけしなどいひてあけてうちまゐり」つかうまつるわひだにこのをとこも見かはしてあはれにいへどわはで見かれす程に、このをとこのわになるをとこありける。　いまれあの人はよにもとはじなにかたのみ給我をおもへなどせちにいへど文はかりは見つゝも、さらにわはで有けりかくいふけしきもとのへはしりたりけり。　女のさとにいでゝあきせむさいなとのおかしかりけ「るをれゐをゐんてすさむに」むすびたりける「このつらかりし人の來てよみたりける」

花すゝき我こそふかく頼みしがほに出て人にむすばれわけり

とよみて物をきたるはやなといひをり人かずならぬ身れなど「うちに遣たるさまにいひければ、」とこもあはれとおもひ、女もあはれお思へどあはでやりつ。このあにのをとこなどかまいり給はぬ。　かの人の心のつらきをいてゐてればすやとて

ひたぶるに思ひゐわびそふるさるゝ、人の心はそれずよの常

かへし

よのつねの人の心もまだみねばなにかこのたびけぬべき物と

「かくいひける程にめぐるとしの神無月になん有けるこのあに心のいとつらければ吉野になんまかりぬるとてよみたりける。

ひたぶるにいとひはてぬる物ならば、吉野の山お行へしられし

かへし。

我宿とたのむ吉野に君しいらばおなじかざしをさし祇れせめ

「今はゆゐまゐにあひにもかんとて吉野といふなりけり。　人の心つらしとていふにはあらさりけり。この人のいもうとにおはしましける」みやす所「ときこゆけるれおほむくすりのさわぎにて、」なやましくなむし給へる、よひにあつまりてさふらふ「に此人のむこになりわしをとこ」きみのくら人といふものしてあからさまにまゐり給へものきこゆんといひけり、かへりとしけしゝばしといふるでとをなんいひやりける。されはをとこ。

宵のまに早慰めよいそのかせふりにしとをうちはらふべく

「とよみたりける」女かへし

わたつみとあれにしとこを今更にはらはゞ袖やあわと消なん

といひければ、人々よひの目さましてなむあはれがりける。又人かずともせぬおそひて心ざしいとふか「くありて男」文おこすれど返ごともせざりければ、いなせともいひはなたれずうき物は、みを心ともせぬ世なりけり「とれがりいひてやみにける。かくて世にさわざいできて」大臣になかされ給ける。むこにて兵衛佐よりたちまのすけにその人もなかされおけり。るとたよりの有ければ遠くてはさおもひて」やみにしをこかゝとほくなりたまふがあはれなることゝいひにやりたりければ「返事にかくなむ」

かけていへば涙の川の世をはやみ心づからやまたはながれん

又おなじ女をいふともなくいはずともなく「としをへてよはふおとこ有けり。」返事もせざりければこゝらとし月おなとか見つとだにの給はぬといひければ、みつとぞいひたりける。それより此女をは見つとずつけたりける。をとこ。

たちかへりふみゆかざらば浜千鳥跡みつとだに君いはましや

○懸賞文藝新題

○第十回題（何でもよし）　　一月十日〆切
　右　美人雪夜に彳む。

○第十一回題（何でもよし）　　一月二十日〆切
　右　難破船の圖題。

○第十二回題（何でもよし）　　二月十日〆切
　右　處女の受情。

○第十三回題（唱歌淨瑠璃及び文章に限る）　　二月二十日〆切
　右　桃花

○第十四回題（文章）　　三月十日〆切
　右　春月

○第十五回題（唱歌）　　三月十日〆切
　右　こぞの燕

○第十六回題（和歌唱歌俳句及び文章）　　三月二十日〆切
　右　春の空

○第十七回題（何でもよし）　　三月二十日〆切
　右　雨中に櫻を折る

右文藝應募者心得

第一　題を種にして成るべく趣向を立てるのを儞ぶ事○第二　唱歌淨瑠璃及び文章は各一千五百字以内の事　第三　一人で二種類の作を投ぜられた人は一種類各別々の紙に書く事○第四　原稿には宿所姓名明記の事○第五　原稿は半紙に限る事○第六　第二第三第四及び第五に背くものは沒書。賞品は等一賞淸親艮信二氏の內御好みの畫家の手に成つた畫帖たけの大さの**肉筆着色絹地**畫一面○二等いらつめ十二部○三等三部。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

雜錄

新年以來の流行

衣服　言ふまでもなく洋服はおとろへて和服が多くなりました。夫人がたの物は黒ちりの三枚重ね、令嬢がたのは濱淺黃の三枚がさね（藍鉄はすこしクスンで居るとて一般には行はれず）　或は小紋ちりめんの三枚がさねで、また小紋ハ猶昨年と同じく一般に流行します。

帯　やはり繻珍が重です。

頭巾　あまり多くは有りませんが、前々號に出した織り小紋の頭巾がすこし有ります。尤も概して色ハ鼠が藍勝ちの方で、白がこぼれて見えるとか、黒がぬいて見ゆるなどいふのは全く有りません。すこし離れては全くの無地ものとしか見えぬぐらゐの處が人氣です。

肩かけ　全くすたれました。たゞ毛織りで薄手の長い方のはひどくすたれたといふ方でも有りません。色は栗茶が主です。その中に白のこぼれて居るのがまた賣れ口のいゝ方です。

日本婦人

この日本婦人といふ文は例の（ガアるす　おうん　ペエぱア）に出て居たもので、詳に日本婦人の樣子を敘べてあります。……いらつめ記者

この十五年このかたあれ程に恐ろしく、且あれほどに速な進歩が日本帝國の開化に現れて、猶ますく進む勢です。一千八百七十三年皇帝が種々の改革をしてからこのかた大に日本の娘たちも影響を受けました。其改良の一つは日本婦人の海外旅行が政府から許された事でその年政府から貴族の令嬢五人を米國へ差しつかはしました。

其改良の二つは日本婦人の洋服着用の許可でした。それと同時に髪結ひに結髪させる不利益が認められました。で多數の髪結ひハ之がため大に――其職を失ふため――心を痛めました。結髪の風習は日本に久しく行はれたもので、非常に贅澤、かつ精巧を極めた物でした。その風ハ前の方へ高く上げて又後ろへ弓ふし、之を黄金の簪、玳瑁の笄などで飾り、猶みだれるのを防ぐため糊付けでまとめ上げるので、また晴れた席へ出る時には此外に花やレボンを付け加へるのです（按ずるに此髪は島田をのみ指したに違ひありません）。

同じ年に歐州暦が日本へ入りましたが、しかし猶日本の紀元は舊のまゝで、それ故日本婦人は一千八百八十五年五月一日と書く代りに二千三百四十五年（二千五百……の誤でしやう）と書きます。　また不思議なのは日本婦人の手紙は左から右へ水平に書かず、意味を代表する不規則な字を縦に書き下す事です。　日本書物もそれ故みな此風です。　日本婦人の時計は廿四時の刻みで、子、丑、寅、卯、辰、巳、午、羊、申、酉、戌、狐（按ずるに狐は猪のあやまり）をそれへ當てはめます（按ずるに古式の時計の事でしやう）。　日本婦人の名はいかにも想像的で、且つ時としては全く詩のとほりです。即ち、涙、菊、朝、ゆき、瀧、蝴蝶いづれも、意味の有るものです。

子供が生れるや否や、男女に論なく頭を剃り、三歳ごろまでは毛の生ゐるのを許しはしません女の子が生まれても富家には家族の幸福が多く加はりもせぬ、其の譯は男子の家と相續させる風が行はれるからで、日本では養子が流行し、それ故女子の後見相續は罕です、が、婦人一体の地位は——支那よりも元來遙に——高いところによつて考へればやがて久しからぬ中この弊風もあらたまる事でしやう（如何にも同感の論です）。　今は顏を匿さずにも婦人は外出しますが、夫を

すでの持った上はその面前でなくては他人と話しは出來ません。　併し上流社會では婦人尊崇の度が大に立ちまさつて居ます。　また上流に洋服も行はれますが、和服も行はれます。　和服は長く着下したこしらへで、腰に Olei（按ずるに字体の似たため Obi との見誤りでしやう）といふ物を纏ひ、それでくゝります。　袖ははなはだ廣く、内側のかくしが有ります（按ずるに袂の事です）。　この服をば色々な物でつくります。

足袋は常に用ゐますが、親指と他の指と別々の場處に入るやうに爲つて居ます。　履きものは下駄といふもので、藁や木でこしらへた物です。　下等婦人は疊みのつかぬのをもちゐ（失笑）、　そして皆家へ入る時は之を脱ぐのが禮で、われわれがつか〳〵履き物のまゝで家に入るのは彼等のきらふ事です。　日本では支那婦人のやうに足をしばる風は有りません、また手袋を用ゐません、が、婦人外出の時には必らず一二本の扇をたづさへます（失笑）。

（未完）

聲を美くする心得

聲を美くする心得も充分に書いた物も無いのみか、間あつ

ても多くは其肝要と言ひ盡くしません。

無論平常の會話にもいらつめ方の聲のうるはしいのも最も床しいものですが、しかしまづ聲を美くするといふ上は其主眼は全く唱歌の方へ傾いて居ます。

歌を唱ふといふ事は其節も肝要ですが、また一つは聲にも有ること、多數の淑女がそのために苦心されるのも又無理の無い事です。

勿論人の聲はそれ〳〵天賦のもので、まづ聲の出る聲帶といふ物が身躰にある、その聲帶は丁度兩方から幕を引いたやうな物で、それに觸れて聲が出るのです。

そして男子の聲帶と女子の聲帶とはもと〳〵其隙間こしらへから違つて居る、といふ譯は女子のは男子より隙間が細く出來て居て、それ故に聲がするどいのです。

美妙齋主人が何かの小說に婦人と言はずに聲帶が細い方と言はれたは實に主人が之を知つて居られたからの事で、其實、廣く言へば男女とも聲は只この聲帶の如何によつて違ふものです。

で、一般に言へば、男子は女子より隙間の廣い聲帶を持つ、即ち男子の聲は女子のより鈍い、男子の聲は女子のより太いと誰も彼も思ふ、しかし、男子の中にも聲の細いのも無くは無い、それはどういふ譯にと言ふに間また男子の中に聲帶の細く生まれ付いたものも有るからです。

兎に角それ故聲の細いのも太いのも天賦の聲帶によるもの故、人の力で之を自由にする事はまづ出來ません。

なる程佐藤進先生や、高木兼寛先生のやうな名人が切開術でも施して聲帶の工合でも直したら直りさうにも思はれますが、殘念な事にはもと〳〵今日の醫學の結果ではまだそれほどの事は出來ぬ、出來なければまづ出來ぬとあきらめるより外に仕方は有りません。

たゞそれのみで無く、聲帶の外ホ顎や頬のこしらへ、また齒ならび、すべて咽喉から音が出てそれが口外まで出る其間の通くる道筋により、また聲のやうすが變はるもので、鳩のやうな含み聲も牛のやうな鼻聲もまた其面から出ます。

それ故よし聲帶だけ直つたとした處が、他の處をも直さなければ何にもならぬ譯、そんな事を療治して居る內には口中はそれこそ疵だらけになつて仕舞ひかねますまい。

まづ〳〵そんな療治で天賦の聲がらは直るものでない。さらば藥でも飮んだらといふに、是もまた似たやうなもの、成効は有りません、否、無い方です。痰や咳ぐらゐを止める聲の藥りは有りますが、聲帶の形までもかへる藥は有りません。

よく傳授など書いてある書物の中には聲をよくする法

なぞゝ言つて出てありますが、まづ成効は覺束ないものです。いらつめに通信問答を開いてからこのかた殳に聲をよくする法について尋ねられた淑女君子は數あることでした。が、終ぞわれ〳〵はその藥りといふ物を答へた事は有りませんでした。　わづかに痰を除くぐらゐの事は出した。が、その外をば何とも言ひませんでした。　實際出來るものなら吾々とて其法をいらつめ方へ御傳へ申しましたいです。が、泰山を挾んで北海をこへる類、全く――他人には出來るか知りませんが――吾々の知つて居る處だけではどうしても出來ぬもる仕方は有りません。

しかし世に完全な物ばかりは無いこと、世のいらつめ方の中唱歌に志しは有つても聲のわるいため望みを遂げずに居られる方も有る、それらの方へ何がな及ぶだけの手段を御知らせ申したいとも思ひます。　で、聲のいゝわるいは天賦として、われ〳〵には――人間には――それが何うも出來ぬかと言ふに、さて全く無くも有りません、有ることは有ります。而も完全な法です。　すこし長くありますが精一杯に書きしるしますからどうぞゆる〳〵御覧をねがひます。

（以下次號）

○漢字異語同義

秀溪子

いさぎよし

清　濁の反。濁らず、すんで見ゆること。

淨　穢の反。塵も垢も無いこと。煩惱のないこと。

潔　清と淨との雙方の意を持つた言葉。

廉　分別あつて妄りに人の物を受けぬ事。德行あつて慾なき意。

白　采色を受けず、少しもまざりない意。

いる

入　出の反。しきりの內へいること。心で云へば心の居所にをること。

容　受けいること。つゝしんで、うちにする事せまい所へいりこむこと。

函　物をいれつゝむ氣味。いれこにすること。又ふくむの意。

內　外の反。外の物をかぎりの內へいれること。

納　その物をいれて、をさめおくこと。

沒　水中へ入れたものが見えないやうになつてしまふ事

淪　小波と淪といつて、水にまきこみ、みえぬやうにな

ること

いそがはし

忙　閑の反。多くして心のせく事。

悤　匆と同。せはしくして、心いそがはしいこと。

閙　静かならぬこと。市中群衆して、もや〳〵さわぐ事。

遽　せはしく、とりこむきみ。

冗　役にも立たぬことお取みたされて、心いそがはしい事。

いこふ

息　いきをいれて、やすむ事。

憩　間をぬかして、ためらふ氣味。

休　その事を仕舞つて、いきをいるること。

歇　息と同。少しひまどりある事。

艾　やみたえること。かりのけてしまふこと。

止　そこにすわつて、外へうつらぬこと。息を入れ、うごにやすみためらふこと。

いる

鑄　金をわかして、いかたおいれこむこと。

いかん

奈　通例耐の字にします。どうもしやうがない、しかたがないとなげく詞。

那　なんでなんであるぞと、彼が所を失ふを問ふ詞。

奚　どこから出てきても、其根原を推して問ふ詞。

いつはる

僞　誠の反。つくりにせるきみ。さうでもないものをさうと思はせること。

佯　内證にさなくして、おもてむきをちがへて見せる事。

譎　いろ〳〵手をかへ、目まぎらしく見せること。

詭　異形に目たちて見える事、さし定まりたることを外へ外づしてするやうなきみ。

誕　ことはをもつていつはること。

謬　そのすぢをとりちがへ、いつはること。

詖　云ひかたの平らかでないこと。佞のきみ。

詳　陽佯と同。おもてむきのみせかけで、相違ある事。

贋　外の物をもつてきて、正物と見せる事。

矯　箭をためる事。うでもない事をむりにしひて、その事おするること。

妄　むりにそれと見せる事。

虚　實の反。一向体のないこと。

文學極衰？

文學極衰！　この言葉を吾々は島田三郎氏、福澤諭吉翁及び其他一二の人から聞きました。　今日の文學は世の好尚のために書く文學と云つて島田氏は嘆かれ、今の文學者に一機軸を出すものが無いとて福澤翁ハ呟かれ、其他の人は今日の文學を拜金主義の下に立つものと評されました。　いづれも一理のある言葉。またそれだけに此等學者もかう迷はれたのでしやう。　吾々は諸氏のいハゆる文學極衰の評にハ服せません。

世の好尚に媚びるとハ何處から見た論でしやう。　今日の屈指の文學(重に小説)ハ强ち左樣ばかりで出來たのでは有りません。　一機軸を出さぬといふのも亦僻論です。　また固まらぬにしろ、此一二年來それ〴〵一派を開いた諸家も有りました。　拜金主義の下に立つとは何故でしやう。　今は金のために書くよりはむしろ名のために書くのが多い方です或は名に傾き過ぎるほどです、實際は。

われ〳〵は一二年前よりも進歩の實を見とめて居ます。三氏の言はれる處の形迹も多少無くハ有りません。が、一般の風潮では有りません。　悟道めいた俗にはあれた新文句は一寸見識の有るやうに見えるものです。

日本の新詩壇

こひねがハくは明治二十三年を日本新詩壇の地ならしとしたいものです。　散文の今日のやうに榮えるのは實に極點に達しました。　其理想の進まぬのは飜つて思へばまた苦勞のいたりです。　理想を進める方便は種々有りましやう。　國民の心の習練元より必要です。　が、吟咏の研究もまた力の有るものです。　散文が理想に及ぼす勢力の度も既に歴史がわれ〳〵に敎へましたが、韻文が殊によると猶直接に心情を叩く勢力の有るのをも亦歴史が敎へました。　既に文を役ふ道に於てハ明治廿二年の諸家ハいづれも甲乙の無い伎倆に達しました。　この伎倆が有れば其方にハらむもあり、あとぶいんぐも有ります。　感情のすさまじいすぺんさあが無いのです。　既に時世の風潮ハ新詩の出現を許すやうになりました。　志のある人が尤も着目されるべき事です。　たとひＳＳ社中の人の(おもかげ)や美妙齋主人の醉沈香がまだ是非の評と烈しく受けぬ時世にしろ、既に一歩このために踏み込んだ人が有ります、在來の小局の吟咏と離れ、充分に規摸の大きな新詩出現の時代を今日につくるべき事です。

小說朱樂に怨みが

雪か知らん、雨か知らん、ところ〳〵お日影を思ハせぶりお洩らすほど猶一入寒く思はれる一月末のこと、ふるへながら小石川の戸崎町のとある水菓子屋へ立つた女の子が有りました。　年は五つか六つ、ねぢきりたいやうな青鼻は通り道に塵埃を吸ひ寄せて畦をこしらへ、曹達で洗つたかと思ふ程お赤毛は艶消しで雀の巣になりさう、言はずとも身に着けたのは——兜なら價のいゝ——山剝ぎの五枚がさねで、穿いた草履がその上に薙刀とは餘程武に凝つた打扮と氣樂な阿房は見るかも知れぬものゝ、どうして其當人の身になつてハ！何かわかりませんが泣き顔でした。　寒風に熟して杏色になつた頬のあたり、眞桑瓜なら鳴子出と言はれさうに小ひゞが入つて、あら！その上を、いとゞひゞを入られる種、乾かぬ涙の痕が見えて居ました。　で、水菓子屋の前まで一散に駈けて來て、其處に全く望みが有つたことゝ見えて、はたと立ち止まりました。

「おやをかしな子だよ」。　と呟くのハ水菓子屋の老婆めでした。　なぜをかしな子？　それもその筈でした。今日でこれで三度、子供が、而も同じ子供が來て店先きへ立ちました。　が、終に一度も一山百文の當り蜜柑一つをさへ買はず、それであつて、また何を思ふのか佇んで泣き顔をして店に飾つてある黃金色に見惚れて居ました。

買ふなら買ふで早く。　で無ければ立ち退く。　どちらにしろ早く〳〵したら宜ささうなもの。　こやつ胡麻化して——あゝ左樣——産婆が臺所の茶碗のひゞきにでも驚いてふりむいて何だねとでも言ふ時——うつと一つ二つくすねる氣で、大方左樣。　それにしろ泣顏とは？　あれはたしかに橫町のくされ士族大矢の娘、この！　蜜柑ひとつも食へないのか、買へないのか。

「何だね御前買ふのかね？」　にく〳〵しい、皺がれ聲で目をぎろり。　「買ふのなら御錢よ御出し。　二度來たぜ今日こけへ。　どうするンだい。」

はて泣き出すとは！　言はれるや否や大粒な涙がぼろり。　老婆はいよ〳〵不審。　けれど、それ客！　ちッ邪魔になるッ！

「おや入らッしやい」。　客を見て言葉から調子までかへる七變化、錢の威光は斯うしたものか。　「何を……はイこれは六……左樣で……六厘で……はい〳〵御籠へ」。

あゝあやかり物な籠。　高が竹。　それで買はれゝば御の字ま

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

で付けられて。人間で「二度來たぜ」言ハれるものも有る世の中に——運は何處にあるものでしやう。客が來ても立ち退かぬ巳餓鬼！「そオれ」、咽喉いつぱいの太い調子、そーして眉根に有りたけの皺をよせて、「ど……どかねェか、御客さまだア」。

一寸突き退けました。が、一寸の氣でも相手はふよ〳〵した子供。足もとは定まらず、ふみこたへる間も無く、大地へ倒れました。時を得た泣き聲。ふッ切ッて立ちました。客もおどろく。産婆もさすがに——良心——後悔、けれど我慢も有りました。おどろかぬふりをば爲ましたが、客は廿一二のどう見ても奥さま、しきりに哀れを覺えた樣子で、みづから——連れた供の下女をも待たず、子供を抱いて起しました。が、そら見たことか、顔に血！

胸にひやりと産婆にも來ました。よく見ればたゞ唇がすりむけたぐらゐな物。大した事でも有りませんでしたが、これが奥さまの注意と買ふ緣となりました。

「産婆さん、この御子ハ此方のでは無いのですか」。

死んだ他人の子より轉んだ我子の方が心痛になる人情。さわがぬ産婆の体に奥さまも物數寄ながら問ひかけました。

（次號で完結）

寄書

女子ハ男子よりも貞節にせんければなりません

京都府　青山まさ子

貞節といふ語は女子の專有物の樣に爲て居ますけれど決して然いふもので無いと思ひます。妾は貞節とは姦淫を愼むヿで宗教家の謂ふ所の邪淫戒とか又は淫するを勿れとかいふ誡則と堅く守るヿと思ひます。して見れば男女共に守るべきヿでしやう。が、女子は男子より一層堅く遵守すべきヿでしよう。なぜと申せば

男女が結婚しますのは其子孫を殖さうためでしよう此れは人間ばかりでなうて禽獸草木に至る迄皆然りです。彼の蝶や蜂などが花の爛熳たる中に飛入り好て其蜜汁を吸はんとて知らず識らず間に雄蕋の葯粉を持ち來り雌蕋の上に着け花木の爲めに媒介をなし遂に幾十百倍の子實を產み出ださす仕組になッて爲ます是れは丁度男女に春慾が起りし時に知らず識らず間に子實を胚胎さすのと同じ道理で即生物存續に必要な天賦の仕掛でしよう

然りながら禽獸草木の子孫は大概自然の機能あッて其生存そるには身体の育養さへならば善美の者となりますけれど其繁殖さすとさとは人の隨意でしよう然し若し禽獸草木の子實を悉く繁殖否しましたら大變で此廣い地球も場處が足りない樣に成りましよう然るに人間ハ中々以てそんな譯にはまいらん者で其子實は必悉く育てねばなりませんそーして同じ動物にても下等の者程育養に骨が折れませんが上等になる程育養に盡力せんければなりません

皆樣御覧なさい彼の青蠅が食物の上に止り忽蛆を產み付けますと其蛆が看す〳〵自御ふて其食物を喰みて生育し親蠅の役介にならずに一人前否一匹前の蠅と成り世人がわいた抔と云はし位ですが之より上等の鷄などは孵化したる後四五週間は倘母鷄等の保育によらなければ生存するヿは出來ませんが其育養法は至ッて簡單で母鷄が所々で有合いせの食料を發見して之を呼び與へ或は懼るゝ時寒時等に之を保庇するに過ぎませんが今一層上等の獸類は亦なか〳〵そんな事では育ちません即母の乳を哺ましたり大小便の世話をもなしそーして時

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

々抱負し殊に猿などは蚕まで捕ッてやりますが之を最上等の人間の育養法に比べて見ると亦余程簡單といはねばなりますまい

人間は哺乳と抱負の外に衣褥沐浴を要し調理攝梅したる物食をも與へんければ生存しられますまい（熱帶地方の野蠻人は此限にあらず）また夫ばかりで無く獸類ハ大抵數旬若くハ數月ふして獨立しますけれども人間は十五六年の後ならでは獨立生存するをハできますまい然して其ばかりで獨立した所が矢張蠢爾たる野蠻人に過んでしよう必半開以上の士女となさんにハ体育の外に心育即智德才藝をも得さしめねばなりませんでしよう言ひ換へれは人は敎育しなければならぬ者です然るに若し男女が恣に春慾を遂げましたならば敎育の出來ない子女を澤山產むとでしよう斯く無敎育の野蠻人が多くなりましたら其國民の幸福は如何でしよう我邦の監獄費は年々七八百萬圓づゝと要るさうですが其犯罪人は七八分迄は無敎育の者じやと云ふとでも若も無敎育の人が年々殖つました日には良民が日夜身の膏を絞ッた報酬も大抵は監獄警察裁判等の費用にせんければなりますまい

皆樣彼の無敎育なるアフリカ土人の狀況は如何でしよう互に他人の物品を盜み奪ひ强き者は弱き者を倒し剝へ其人の肉をも喰ふと云ふとです之に引替へ敎育の行居きたるアイスランドには一人の犯罪人も無かッた年があるさうですして見れば敎育の大切な事は解りきッて居ます其大切な敎育を仕たくても出來ない人間が我日本帝國人の大半を占めて居ます（學齡兒童の就學する者百分の五十に充たず）此樣な馬鹿氣た小供を澤山に產むと產まぬとハ女子の貞節と不貞節とにあるとでしよう斯く申さば否それは男子も同じ事じやと大仰の方もあるかも知れませんが倘暫くお聽きを願ひます

皆樣飢渴の時に飲食ひ致しまする と美味で快樂でしようが元來飲食するのは只口舌のみを樂しむるが主眼で無く必身体を滋養するが本意でしようですから男女の結婚するも之と同じ主意でしよう故に女大學ふも子無き女は去るべしとありますは是れ些と著者の偏見で夫婦に子の無いのは必しも女子の罪とばかりハ云へませんが兎ふ角夫婦ハ兒を生むのが主眼での情交以下の樂みは飲食で申す美味でしよう然るに人ハ情慾の奴隷となるとありて口舌の快樂を貪る爲めに身体に無用の飲食を爲すとあり或は春慾を逞うする爲めに無用の兒と生むとありですそして其無用の兒とは敎育のでき無い兒の事で其慾を鎭制する力を持ッてぬる者は女子ですが抑蟲魚類ハ母の胎內を出づれば直に自生存しますが鳥獸類は母の保育を要し人類ハ父母の共育によるとハ明白でしよう然るに女子が若し不貞節にして姦淫（私通間夫の類）を爲し私生の兒を擧げましたら其兒ハ母一人にて引受け育てねばなりますまい之に反し男子が若し不貞節して姦淫（妾變を置く類）を爲し庶子を擧げても其兒は矢張父母の共育を受けられましよう即我邦の貴紳方にハ庶子が澤山ありまして大抵は敎育もできて反ッて本妻の兒より賢明の方が多い樣ですが棄兒の中には往々後宝令嬢の私生がある樣です殊ふ我邦は血統を尙ぶ慣習がありましてふけなくも

皇統一系ハ萬國に冠絕する所以です男子の不貞節ハ女子の不貞節程の害は無いです然るに近頃一種の女流が蜂起して基督敎主義を經とし男女同權說を緯とし浮氣な亭主の不貞節を抑制しやうとなさるのハまだしもでそが有妻夫の犯姦律とやらを刑法に加へられんとを建白しなさいましたのはどんなお心意氣でしよう寡聞淺見の妾ながら公平無私の心で評しますれば其論說文と視ても其私話を聽ても其品行を觀ても其安ずんずる所を察しても只管情交若くは肉交上の不權衡を鳴らすに過ぎ無いで產兒育養の利害話は無い樣ですうして其內情を分解しますれば自分の貞節ハ餘り好か無い方で亭主が妾を蓄ふならば妻も間夫を置て可なり妻が間夫ふ通じたのを罰するならば夫の妾を蓄ふのも刑すべしと云ふ樣に聞にます歐米の一夫一婦國にも間夫が澤山あるさうです之を歷史に徵しても世間の出來事に觀察しても姦淫する者は反ッて嫉妬深いです嫉妬深い貞女は未だ曾て之を聞かずです男子が若不貞節でも女子が貞節ならば產兒は父母に育てられます男子貞節なるも女子不貞節ならば其兒は父無之兒です庶子は嫡子に如かざるも父無の兒に勝ります不貞節の男子の兒は庶子です貞節なる男女の兒が嫡子です一夫一婦は正經ですが不貞節の罪は男女同等にハなりますまい嗚呼我姉妹づ悍驚殺伐の犯姦律を耕らず自善く其貞節を守り婉順なる淑德の妙力によりて男子を正道に誘ふ工夫は無いですか

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

答書

花及び色の投票

花
- 一 梅
- 二 菊
- 三 櫻
- 四 水仙
- 五 藤

色
- 一 せんさい
- 二 緑
- 三 とき色
- 四 利久鼠
- 五 濃茶

村上つる（ビンゴ）

花
- 一 梅
- 二 櫻
- 三 牡丹
- 四 菊
- 五 杜若

色
- 一 淺黄
- 二 とき色
- 三 紫
- 四 海老茶
- 五 あゐ鐵

大谷旭子（サイ京）

花
- 一 梅
- 二 菊
- 三 櫻
- 四 蓮
- 五 水仙

色
- 一 白
- 二 白茶
- 三 桃紅
- 四 紺鐵
- 五 水淺黄

海老沼貞子（トウケイ）

花
- 一 さくら
- 二 梅
- 三 海棠
- 四 菊
- 五 水仙

色
- 一 とき色
- 二 緑
- 三 紫
- 四 眞紅
- 五 淺黄

佐倉かすみ（ハリマ）

通信問答

濵野ちよ子樣へ「たしば」は晩い幽さいふ意味、「かたのまよひ」は肩のやぶれさいふ意味、「みさのまくはひ」は嫁合さいふ意味、「あまごもり」は雨にふりこめられて外出ができず、家にこもるのを言ひます。

淺田小紅女史へ　石版石はばゞりや國の産が最上です。

つれ子さまへ　頭巾を低れ下げに被る風は今流行しません。

ゆふぐれせさまへ　（一）いくら望まれてもいはれなく婦人が若年の男子などに寫眞を贈るもので有りません。正當の理由が有つて保護者（兩親さか伯叔父母、兄姉さか）の許可を得たなら格別です（二）新聞へ廣告して求婚するのは日本の今日の事情ではまだ戯れに近く思はれますから御止しになつた方が宜さゝうです。

つる女さまへ　東京で奉公をしてろして堅く身を持たうさいふのは先望めません。　糊口のかたはら勉學或は料理を覺ねたいさ仰せろならば女學雜誌社へ御尋ねなさい。　同社では交際案内さいふ事をして其やうな周旋を爲ます。

天保子さまへ　即眞居士の本名は小宮山桂介、藤陰隱士のは藤本眞です。　南翠外史は京ばし區築地一丁目に居ます。

はつ子さまへ　前のいらつめにも出しましたが、春のや主人も南翠外史も鷗外漁史も美妙齋主人もみな烟草を吸ふ人です。

大川きぬ子さまへ　前々號のいらつめの說により肩掛けを御廢しになつたさの事有りがたく存じます。　御好みが有かは知りませんが、藤むらさきの中襟に淺黄ちりめんの羽織りハ映りがわるいです。

野田さまへ　封袋へきつかり中の紙が入つてないのは西洋では大失禮さします。

みれ子さまへ　（一）石原かずね令孃は高等女學校で學ばれた人です（二）美妙齋主人は最初に千蔭を習ひ、次に空海、次に定家を習ッたのです。　られ故に今日の書蹟も其面影が見えて居ます。

翠汀女史へ　（一）笑林廣記さいふのは支那の滑稽落語を蒐めたので、あまりいらつめの見ていゝものではありません。　中々猥褻な作です（二）皮杯さは支那の小說によく見ねる字、この意味は口うつしに酒を飮むことで、即ち口を杯に見立てたさの事です。

津田さまへ　（一）咽喉の乾く時には酢をすこし飮むさ直に乾きが止まります（二）晴女史の本名は岡本ゐい子。高學女學校で學ばれた人です。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

廣告

注意 いらつめ第廿四號に處方を出したハンドコロン、及び第廿八號に製法を載せたポマドンヌール共近頃麁惡な劑料を以て僞造品を賣る者が有ります。翁屋へ托して弊社で發賣させる上は一々劑料を吟味しますが、麁惡な劑料で名を冒して發賣されるに於ては其效驗の無いのは勿論の事、啻に弊社の迷惑のみか又御求めの各位の御損です。東京では直接に翁屋から御求めになる便も有りますか、地方ではそれも叶はず、蔭ながら御迷惑御察し申します。因ッて今度から手數ながら弊社で地方の各位に右兩化粧品賣買の御紹介を致します。御用の御方は弊社又は翁屋へ向けて直接に御申込下さい。其場合ひに於ては弊社で包の紙に保證の捺印をして差し立てます。御申し込は定價を添へるに限ります（郵券代用御斷）。定價ハンドコロン一瓶七十五錢、ポマドンヌール廿五錢、遞送料其他御注文の心得はいらつめ第廿九號の廣告にあります

成美社發送掛

いらつめ **合本**

明治廿二年十、十一月分○紙數百二十六頁○價郵税共十七錢五厘○廿八號ゟ卅三號迄揃ひ○明治廿二年十二月分○紙數八十四頁○價郵税共十二錢○いづれも府内は無郵税

右十二月分合本は一月十二日から發賣○郵券代用は五厘切手で一割ましに限る。

いらつめ**廢本非常廉價賣捌**の處瞬く間に**品切**となりましたゆへ**更に普通本を**廢本と同樣の**廉價**で賣ります但**非**常の廉價ゆへ**割引を爲ません**

一冊三錢郵税各五厘●十二號廿四號皆無●前金領收の上發送

成美社

樂器着荷

兼て歐米へ注文致置候オルガン、ヴアイオリン、ピヤノ並びに同書籍等今回各種着荷仕候に付非常の低價を以て貴需に應ずべく候間何卒陸續御用有之度願上候

神田區通鍋町 **高木商店**

○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

米國新製絨氈羅氈塵去り器械

○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

堅牢無比、便利一等、切地を損せずに秋毫の垢埃をも去る器械○貴紳の住宅に最も必要の品○一個四圓五十錢

專賣　神田區通鍋町十番地 **高木商店**

保險紺金巾

紺金巾の製造は今日に始まつた物でも有りませんが在來の者は舶來品と比へれば雲泥も啻ならずでありました實に殘念の至りです故に私方では數年此方肝膽を碎き色々と工夫しましたが終に此頃に至り外國品に優るとも決して劣らぬ品を作り出しました。第一仕上け方に就ての注意は他に類は有りません。餘計な飾りて人目をくらましそれで一時を瞞着ずる樣な事は一切せず唯實用をのみ旨と心掛けました。針のとじ穴も多くは皆地質をいためるのもかまはず何處ことの論なくとぢますが是も實用上少なからぬ害となるもので、私方では之をも避けて決して害になるやうな綴方をいたしません。色艶も左樣です口と奥との色をちがへ口ばかり美麗に見せて人を欺く奸商も世に多いそれとば私方では最も注意して口も奥も皆平等に麗はしく致します。そべて染方といひ保方といひ幅といひ尺といひ皆注意の上に注意を加へ染色は熱湯に逢つても決してかはりませんそして價は舶來品より餘程廉下ですうの他一切のことすべて外品にまさらせましたからには御用ゐになる方には此上もなき御徳用の品です即ち保險羽二重金巾と名つけた故です右紺金巾の外私方では他の品々をも取り扱かひ別段廉價に差上げます。

一染巾金いろ〳〵　一晒金巾いろ〳〵
一晒天笠木綿いろ〳〵　一丸善木綿いろ〳〵
また外に夏向中形るゐをも澤山製造して販賣します

明治廿二年八月一日改正

東京日本はし區富澤町十七番地南側中ほど

小松太助

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

●問　一年の計は春に在りと云ひ升、此一年ハ何如しましやう。答何よりも先づ少し學問を爲さッては如何です●問　學問は勿論したいのですが此としでは學校にも參られませず、獨りで稽古も出來ませぬから當惑し升。答ナンノあなた學校も行かず敎師もなくて能く學問が出來ます、其は六かしいに秘傳でもありません先つ次を御覧なさい

通信女學發兌廣告

一年で女の心得になる學問を手易く敎授し家に居て用事の暇ま〳〵に稽古の出來る樣に仕組たるものにて文章は誰にも讀める程にやさしく其上伺わからぬ時ハ手紙にて質問の出來る樣に致し、毎月一册發兌し左の諸科目を敎授す

家政學、作文法、和學、漢學、英學、萬國史、日本歴史、算盤、理化學、生理學、動植學、歌詠方、圖入地理、英學、

敎師は醫學士三島通良、鈴木弘恭、木村祐吉、其他重も明治女學校の敎員諸君に委賴し專ら親切鄭寧を主意とす○一册二百頁にて一年二千五百頁となる之にて女子一と通りの學問を悉く敎授し年末紙上試驗を行ひ及第する者には女學雜誌社通信女學部卒業證を寄す○一年の計は春に在去一ケ年の徒らに過しことを思へば此一年是非とも心掛けて普通女學を修業する事肝要なり夫には一月最初の分より購讀せねば中途にて心付くとも既に遲し●一册三十二錢にて全國郵税なし半年分前金一圓八十錢同一年分三圓五十錢、女學雜誌と合せ講讀する者には各一割つゝ減ず○毎月十日發兌○

東京富士見町二丁目　**女學雜誌社**

いらつめ第卅五號目次（明治二十二年十二月十五日）

●小說心づくし第三回下毛布野女史、●家政裁縫獨學び（初等第五）木下貞子○一身を裁つ法‖三つ身を裁つ法‖四つ身を裁つ法○衛生料理法（第七）岩間芳松○雜菜料理‖蓮根人參油揚げ煮‖大根人參燒豆腐蛤汁煮‖芋から切り干し大根油揚げ煮‖人參里芋油揚煮蓮根牛房むし鉄の油いり○衛生三食見立て第二日分及び三日分●文藝美術明治廿二年の日本文學世界○五社百詠（其一）俊成卿●雜纂女生徒肩掛漫評‖序跋題辭の盛衰‖女用文章獨學（其三）‖普通語「ある」の意味‖色の取り合せ方（其二）‖米澤鷹山侯女中示し書き‖小倉式紙及び其奇談‖歳暮新年及びクリスマス贈り物見立て●寄書名刺用法槐月陰史‖日本白粉化粧後の注意西尾さとん‖花及び色の投票●通信問答鳥の足‖咽喉カタルを防ぐ事‖最惠國及び倶樂部の意味‖最良朱肉製法‖千蔭筆百人一首‖ニキビを除く事手の肉を柔にする法‖外數種●答書しつかりした手跡の女用文習字手本‖牛馬肉簡易鑑別法‖屠肉死肉簡易鑑別法●餘興附錄入り

いらつめ第卅六號目次（明治二十二年十二月廿二日）

●家政押し繪作り方（第三）石原一枝孃○押し繪に金粉で筋を入れる仕方‖梅に式紙のカアド（圖入）‖梅に鶯のカアド‖芙蓉の羽子板（圖入）○衛生料理法‖第八岩間芳松○上等料理‖鷄のむしやき●文藝美術文と語調との關係（其一）美妙齋主人○五社百詠（二）俊成卿○懸賞唱歌「歳暮」●雜纂米澤鷹山侯女中示し書き（承前）‖色の取り合はせ方（承前）‖女生徒肩掛け漫評（承前）‖普通語「です」と「でざいます」と「でありまそ」‖最良朱肉製法●小說歳の垣（其一方）田中龍濯●寄書女生徒のために最も親切な下宿屋を開きたし（鷹野きやう子）●答書鹿皮の手袋を皆達で洗ッて硬くなつたのと柔にする法●通信問答げじに紙められると毛かぬけるとの諺‖藥を引いた鐵鍋‖珊瑚珠の根掛けの油拔き方‖醬油のカビを防ぐ法‖温泉‖醫學と外國語‖矯風會‖シヤボンの後に硼砂‖東髮のくせ直し‖鉛筆畫手本‖●彩畫手本‖仰天子霞亭主人露伴子嵯峨のや氏笠園主人の本名‖硇砂と硼砂‖疑問●餘興新題及び解答

いらつめ第卅七號目次（明治二十二年十二月三十日）

●小說年の垣（其二方）田中龍濯●家政裁縫獨學び（高等第五）木下貞子○給長襦袢及び半襦袢縫ひ方○衛生料理法（第八）岩間芳松○上等料理相鴨小鴨及び鴨むしやきロース‖鳩むしやきロース‖鶉鴫むしやき‖鳥のむしやき野菜を煮る心得○衛生三食見立て（第四日及第五日分）岩間芳松●文藝美術歳暮の文竹屋雅子○懸賞文藝唱歌文章●雜纂饗庭篁村氏‖日本文學史に小說を省く‖國民之友の新年附錄‖喪服の色‖帽を去る禮‖ちやあれす二世の滑稽‖廢娼論‖或人の辭世‖毒朱唇どうでの新作●寄書初春の遊び藤のやゆかり●答書陰陽曆相當表●通信問答二葉亭嵯峨のや二氏の本名及美妙齋紅葉二子の年齡‖天刑病筋を知る法婦人目の下に子の字をつける‖牛乳に就いて一切‖硼砂を解かす事‖硼砂で齒をみがく事‖小そばかすを去る法‖腫物の痕の紫色を去る法‖聲をよくする法

印刷所　東京神田松下町十三番地　館田活版所

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY